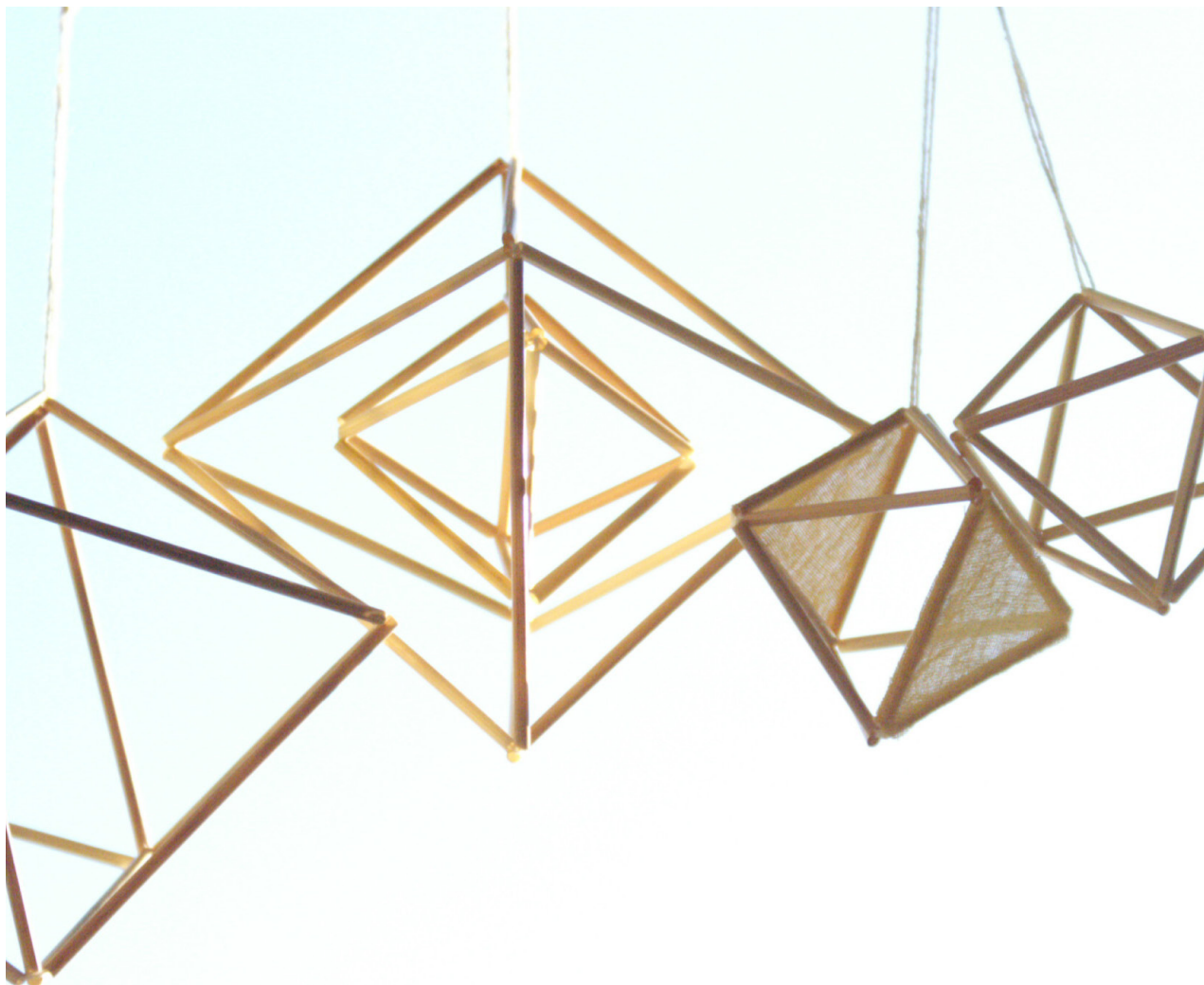


IDDNewsletter..... 6

2021 June



特集

一から作り出す～種から芽吹く藍と麦

現代では伝統工芸と呼ばれる蓼工芸と藍染め。どちらも日本人の日常生活からは離れ、その技術を受け継ぐ人も少なくなってきましたし、残すための努力をしない限り、残るものではなくなっています。例えば、町おこしとしての体験活動や、作家さんによる異国のアート素材だったりそれぞれにあたるでしょう。これらの素材を使った制作には、手間やコストが付きものですが、作品が完成するまでの工程で、他にはない価値があるものと感じます。

情報デザイン科では、科目「造形デザイン」の教材として、草木染めとヒンメリを扱っています。昨年度の学習から2年目となる藍の栽培と、初めての挑戦となる麦の栽培について情報発信いたします。

一から作り出す～種から芽吹く藍と麦

現代では伝統工芸と呼ばれる蓼工芸と藍染め。どちらも日本人の日常生活からは離れ、その技術を受け継ぐ人も少なくなっていますし、残すための努力をしない限り、残るものではなくなっています。例えば、町おこしとしての体験活動や、作家さんによる異国のアート素材だったりそれがそれにあたるでしょう。これらの素材を使った制作には、手間やコストがつきものですが、作品が完成するまでの工程で、他にはない価値があるものと感じます。

情報デザイン科では、科目「造形デザイン」の教材として、草木染めとヒンメリを扱っています。昨年度の学習から2年目となる藍の栽培と、初めての挑戦となる麦の栽培について情報発信いたします。

昨年度の授業でのものづくりにおいて、一番力を入れていた藍染め。種から藍を育て、収穫した藍で生葉染めをするまでの道のりは、容易いものではありませんでした。「藍は強健」「一度植えれば、こぼれ種から生えてくる」などの情報を浅く聞き取ってしまいましたし、手入れの方法やうまく育つ条件などは二の次で、絞り染めの技法習得に時間を割いてしまいましたから、それはうまくいくはずがないと反省しています。

竹内淳子著「ものと人間の文化史65 藍 風土が生んだ色」では、藍作を行っている篠原さんへのインタビューにより、以下のような工程が必要だということがわかりました。

4月に入ると苗床をつくる。苗床の肥料は豆かすと鶏糞。

4月7日頃に藍の種を蒔く。

6月3日前後に本畑に移植。苗を10本ほどまとめて植える。 除草剤は使用しない。

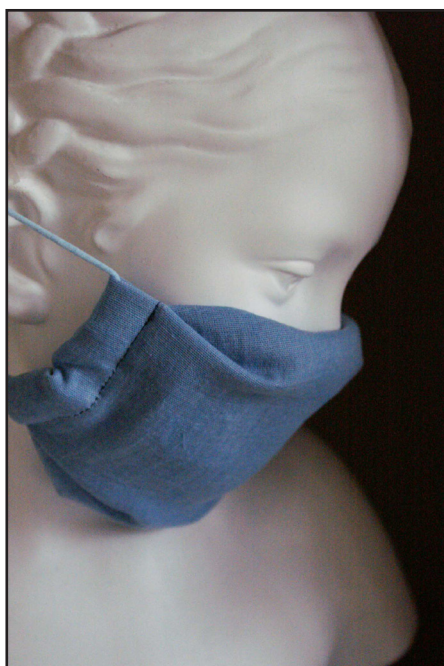
8月3日前後に一番藍の刈り取り。

9月20日過ぎから二番刈り。

このように書かれていますが、ここ北海道銭函の気候を考え、1ヶ月遅れの工程で進めるのが良さそうだと判断しました。また、昨年度の反省より、潮風が当たりにくい場所を開墾し、ビニールで覆うことも考えながら進めています。

北海道での藍作は、現在も伊達市や札幌市のあいの里で行われています。どちらも明治の開拓初期に徳島県出身の方が大規模農場を夢見て入植し、開墾したことから始まっています。タデ藍の収穫量日本一は徳島県で、2位が北海道伊達市となっており、その2位を守っている伊達市の藍農家さんは1軒だけとなっているようです。同じ北海道で藍を育てている地域があり、育てている人がいる、それも藍作を薦める励みとなるものですが、なんと言っても藍染めによる作品の表情は多彩で、特に生葉染めで生まれた色は、温かみのある空色。「またこの色に会いたい」と学生さんの心も虜にしたほどですから、畑の開墾も種まきもワクワクが止まりません。

さて、今年は畑に新入りです。これもワクワクの要因かもしれません。その新入りは麦です。麦を栽培するきっかけと



(左) 藍生葉染めガーゼ生地によるマスク縫製 (右上) 藍染め用の生地の準備 (右下) 藍の種を蒔いた種苗床。※藍の種は、徳島県立城西高等学校より無償でいただきました。

なったのは、ヒンメリ制作を始めたことです。当初は、手に入りやすいストローを使って制作していましたが、それでも十分な作品を作り上げることができていましたが、制作途中に「本物」を知りたくなったのです。麦を育て、その麦わらでヒンメリを作ろう！というさらなるプロジェクトです。北海道では作家さんが大学と連携したヒンメリ制作をしていたり、美しい麦畑を伝える会などでヒンメリのワークショップをしていたりと、調べてみると様々な活動が行われていることがわかりました。

ワラ（藁）は、稲や麦をはじめとする植物の茎を乾燥させたものであり、特に稲ワラは日本でも古くから、生活に欠かさない素材として重宝されてきました。ゴザ等の敷物や帽子などの装具、しめ縄や宝船等の縁起物・飾り物などがあげられ、さらに牛や馬の飼料になり、不要になったワラは堆肥としても使われ、捨てるところのないくらい日常生活で活用されてきました。

ワラは、大まかに「稈（かん）」、「ハカマ」、「ミゴ」という部分からなっています。ヒンメリは、「稈」と呼ばれる茎の部分を使います。上下にある節の間はストローのように空洞になっていますから、節を取り除き、そこに糸を通して八

面体を作ります。

ヒンメリはフィンランドの伝統的なヨウル（冬至祭）の装飾品で、太陽がほとんど顔を出さないフィンランドでは、その年の豊作を願うシンボルとして、冬至に麦藁で作った大きなヒンメリを飾ることから、別名「光のモビール」と呼ばれているそうです。ワラを使ったヒンメリは、ナチュラルな風合いでありながら、光を浴びると黄金色の輝きを放ちます。その輝きは温かさを感じ、ずっと見ていたくなります。私のお気に入りには鏡越しに見るヒンメリです。しっとりとした佇まいは、落ち着きを与えてくれるようで不思議な感覚になります。

藍も麦もまだ発芽した段階ですが、これらが育ち、材料となって手に取る日を待ちわびながら、藍染めのデザインやヒンメリの八面体の組み合わせからなるデザインをイメージしていきたいと思います。

IDDN



(上) ライ麦の種まき (左下) 芽を出したライ麦 (右下) 廊下に仮説展示した試作のヒンメリ

Contents

2-3

特集

一から作り出す〜種から芽吹く藍と麦

現代では伝統工芸と呼ばれる藍工芸と藍染め。どちらも日本人の日常生活からは離れ、その技術を受け継ぐ人も少なくなってきました。残すための努力をしない限り、残るものではなくなくなっています。例えば、町おこしとしての体験活動や、作家さんによる異国のアート素材だったりそれがあたるでしょう。これらの素材を使った制作には、手間やコストが付きものですが、作品が完成するまでの工程で、他にはない価値があるものと感じます。

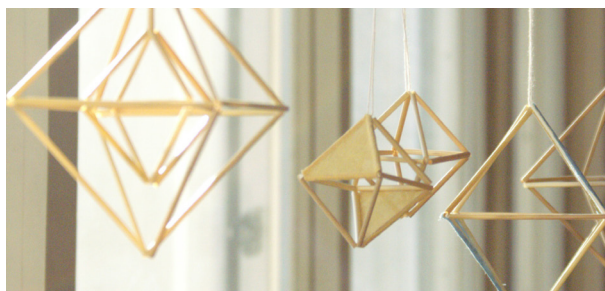
情報デザイン科では、科目「造形デザイン」の教材として、草木染めとヒンメリを扱っています。昨年度の学習から2年目となる藍の栽培と、初めての挑戦となる麦の栽培について情報発信いたします。

Welcome to Information Design Department!!

北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」をお読みいただきありがとうございます。

コロナウイルス感染拡大により、全国的に大変な状況が続いていますが、皆様の御健康をお祈りするとともに、平穏な日々が一日でも早く戻ってくることを切に願っています。

引き続き、学生の皆様がより学びを深めていけるよう、スタッフ一同誠心誠意指導を行って参ります。



○オンデマンドによる入学説明会の開催

専攻科情報デザイン科では、次年度の入学説明会を6月4日金曜日より、オンデマンド配信いたします。詳細につきましては、Web ページ上での情報公開をしています。また、その旨のご案内を各関係機関に電子メールで送付させていただいております。

申し込み締め切りが5月31日に迫ってきておりますが、美術・デザイン等の造形分野の学習に興味を持たれている方は、この機会にぜひ御参加ください。

皆様の御参加をお待ちしています。



情報デザイン科学科だより

Information Design Department

IDDNewsletter

June 2021 6

IDDNewsletter

June 2021

発行人／北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」編集チーム

発行／北海道高等聾学校

〒041-0261 北海道小樽市銭函1丁目5-1

www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp

※ご意見、ご要望などにつきましては、上記 Web ページより電子メールでご連絡ください。